

豊かな表現力を育成するための総合学習単元の開発

十和村立十川小学校 教諭 嶋 恵里

1 はじめに

本来、子どもというのは可能性に満ちていて、疑問や思いを純粹にぶつけてくる伸び伸びとしたエネルギーな存在である。要するに、子どもは表現したいという願いを持っている。しかしながら、社会環境の変化に伴い、人間関係は希薄になり、反社会的な問題行動や不登校など閉塞感を覚える子ども、生命の尊さを実感できない子どもが増えている。そのようなニュースが毎日のように飛び交う現代、豊かな感性を育むことの大切さを実感する。ここで言う「豊かな」とは、五感を通して多様な体験活動を経験することにより、共通感覚^{*1}を養い、自己表現だけでなく他者を受け入れ思いやること、としておさえておきたい。そのためには、多感な小学生の時期に表現する喜びや感動を味わう機会が学校教育では必要不可欠である。

高知県は、複式・小規模校が多く、今後さらに、市町村合併や小・中学校統廃合化が進む傾向にある。筆者は、どちらかと言えば小規模校での経験が多い。小規模校ゆえの子どもの実態として、上学年になるにつれ人間関係が固定されがちで、一人一人は純朴でそれぞれによさや力を持っていないながらも、集団になると個々の本来の力が発揮できないという現状を見てきた。つまり、自分に自信が持てない児童が多いことを実感した。

平成 10 年 7 月 29 日の中央教育審議会第一次答申では、学習の指導と評価の在り方において、「自ら学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力などの資質や能力の育成を重視するこれからの学校教育においては、従来のような知識を教え込むような授業の在り方を改め、子どもたちが自分で考え、自分の考えをもち、それを自分の言葉で表現することができるような力の育成を重視した指導」の必要性を示している。また、総合的な学習の時間のねらいや学習活動等について、「各学校の創意工夫を生かした横断的・総合的な学習」や「児童生徒の興味・関心等に基づく学習」が望まれるとしている^{*2}。

そこで、学習指導要領には総合表現は明記されていないが、「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」^{*3}の基本的なねらいから総合的な学習の時間を核として実践することは可能である。また、平成 15 年の学習指導要領の一部改正^{*4}により、各教科等で身に付けた力、特に思考力や表現力を総合的な学習の時間に発揮させていくことが求められるようになったことから、児童が教科で学んだ多様な表現活動を総合的な学習の時間で発展させるような学習を積極的に展開することに努めたいと考えるようになった。

2 研究の目的

- (1) 多様な総合表現の類型化及び各学年に応じた目標の体系化を行う。
- (2) 児童自らが生き生きと意欲的に活動するために教師の支援はどうあるべきかを検証し単元を開発する。
- (3) 総合表現活動における教科と総合の関連について、教師がどのような手だてをとっているのか分析する。
- (4) 上記の単元の有効性について検証し、総合表現活動の教育効果を見取り、豊かな表現力を育成するための単元開発について提案する。

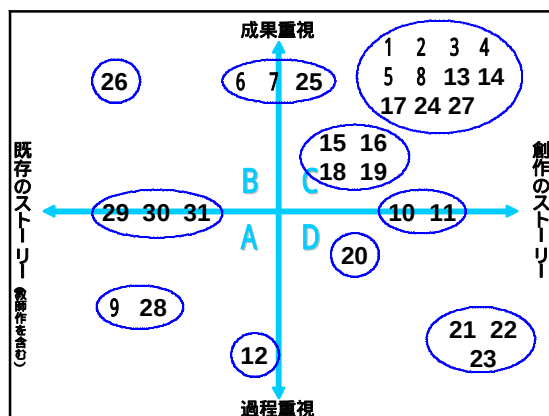
3 研究内容

(1) 身体表現に焦点をあてた類型化

総合表現には、ミュージカル、オペレッタ、演劇等の身体を使う表現活動と、人形劇、電子紙芝居、ペープサート等々、直接は身体を使わない表現活動の実際としては多様な取り組みが見られる。ここでは、身体表現を含む総合表現に焦点をあてた類型化を提示する。

類型化を行うにあたって、軸をストーリー作成の主体者である「ストーリー作成者」と「完成度」の視点で分類した。図中の番号は事例を表し、分析結果をグループ化したものである。横軸は、ストーリーが既存（教師作成を含む）のものと、児童・生徒が創作したものとし、右に行くほどもともとある物語や教師が作成した物語ではなく、児童・生徒の創作による物語になっている。縦軸は、高い完成度を求める成果重視と、完成度はあまり重視せずそれよりも取り組む過程重視とし、上に行くほど作品としての完成度は高くなっている。

そこで、先行研究や先行実践校の事例分析から、本研究で取り入れようとしている総合表現の一つであるドラムジカ（歌と台詞と身体表現を総合的に組み合わせた総合表現活動）の特性を明らかにしようと試み示したのが、図1や表1のタイプの分類である。



【図1】表現活動の類型

【表1】表現活動の類型

類 型	内 容	事 例
Aタイプ (既存のストーリーで 過程重視)	もともとある物語を演じることを楽しむ表現	- 筑波大附属小学校高学年 「狂言風 桃太郎」 - 兵庫教育大附属小学校1年生 ミュージカル 「ジャングル ジャングル」
Bタイプ (既存のストーリーで 成果重視)	もともとある物語を演じ高い完成度を求める表現	今田小6年 「ペロ出しチョンマ」
Cタイプ (創作のストーリーで 完成度が高い)	学習したことを創作のストーリーに仕上げ、高い完成度を求める表現	- 広島大附属三原小学校6年生 「わが社の特ダネはこれだ」 - 今田小学校5年生 「今田の自然環境フォーラム」
Dタイプ (創作のストーリーで 過程重視)	学習したことを創作のストーリーに仕上げ、演じることを楽しむ表現	- 泊小学校全学年 総合表現 - 大島小学校3年生 「みんな笑顔で」

(2) 各教科における表現に関する目標

多様な総合表現の類型化を行うと共に、各学年に応じた目標の体系化が必要と考え、表現に視点を置いた目標を低・中・高学年の段階で教科ごとに作成した。その理由としては、各教科における表現に関する目標を示すことにより、総合表現活動における個々の児童の様子や到達目標のめやすを教師が持つことができ、複数の教師でかかわった場合も基準ができるのではないかと考えるからである。総合的な学習における表現は、学年が進むに従って、表現そのものを楽しむという学習から、自分たちの学びや思いをまとめテーマ性のある表現を外部に向けて発信していく学習へと発展

していくと考えられる。低学年では、表現することを楽しみ、中学年では、表現することを楽しみながらもテーマ性があり、高学年では、テーマ性が色濃くなり表現技能も高くなるといった段階である。

また、身体表現の目標を作成した理由としては、「身体運動・表現運動」を現在の学校教育でどのように取り入れることが望ましいのかを考えると、感じたことを動きとして表現できる体にするための基礎を培っていくことが大切である。身体表現は心と体である。つまり、これは相手理解につながっていく。体験することで人の動きを見て感じることができ、豊かになれるといった、人間が育っていくのに大事なものが身体表現にはある。そこで、身体表現の目標については、心情面と技能面から作成した。

作成にあたっては、学習指導要領「国語」「図工」「音楽」「体育」の表現に関する目標及び先進校である泊小、大泉小、福島大附属小、とよみ小、本町小の表現に関する目標を参考に作成した。

(3) 総合表現活動が定着するために求められる条件

豊かな表現力を育成するための単元開発を行うための手だてを次の3校の事例について分析した。その場合、「学習環境」「学校体制」「学級経営」の3つの視点から分析することで総合表現活動が定着するために求められる条件を整理してみた。

〔事例1〕鳥取県湯梨浜町立泊小学校

〔事例2〕A県B市立C小学校

〔事例3〕金井（1999）^{*5}の先行研究

総合表現活動が定着するために求められる条件として、学習環境における1つ目は、「豊かな体験活動」である。自然や生き物に触れたり、栽培したり、地域の人と交流する中で感性が磨かれる。また、多様な表現活動に触れる機会を保障することで、児童の表現活動を豊かなものにする。体験からの学びは、児童の表現力を引き出し深めることができる。

2つ目は、「表現活動が可能な場所」である。児童が伸び伸びと表現できる多目的教室など広い空間の場所の確保は、総合表現活動を行う上で必要条件である。

3つ目は、「表現力を支える人的環境」である。泊小のように、読み聞かせボランティアであったり、専門的分野のゲストティーチャーであったりするが、このように地域と学校がつながることが児童の表現力を支える環境になっていると言える。

学校体制における1つ目は、「協同的に働く」である。教師集団が協力しあえることが児童の学校生活全般に影響を及ぼす。特に、情意面が作用しやすい総合表現活動においては、児童の意識や成長に関係がある。

2つ目は、「教職員一人一人の専門性を生かし、広げる」である。それぞれの得意分野で指導しながらも教職員同士がつながれば児童の表現力を深めることができる。

3つ目は、「児童の表現を共有し、表現活動の充実を図る」である。これは、校内研修の中で、教師自らが多様な表現活動の機会を設けることである。教師も体験することで、児童の思いに近づけたり、手だてや支援を振り返る学びになる。

4つ目は、「児童の表現活動の様子を発信する」である。学校通信等で児童の様子を知らせ、保護者や地域の人に理解してもらうことは大切である。

学級経営における1つ目は、「安心して表現できる」学級づくりである。学級担任の願いが、視覚に訴える学級目標の掲示であったり、日々児童へ投げかける言葉であったりする。

2つ目は、「表現への意欲を促し表現力を高める」ための手だてとして教科との関連である。表現への意欲を促し表現力を高めるには、綿密な計画を立て、常に教師は意識して一日の流れの中で、または単元、年間を通して行うことが大切である。

3つ目は、「児童の表現活動の様子を発信する」である。学校通信と同様、学級通信等で児童の様

子を知らせ、保護者や地域の人に理解してもらうことは大切である。

総合表現活動は学級担任が中心となっていく場合が多い。しかし、学級経営レベルでの条件だけ整っていても児童の表現力を引き出し伸ばすことは難しい。学校体制や学習環境が整って初めて学級経営がスムーズに行われ、表現活動においても児童が伸び伸びと表現できるのである。

(4) 単元の実践

研究の対象・期間・分析方法は以下の通りである。

時期・時間 平成 17 年 9 月 27 日～10 月 5 日（14 時間）

対象・学年・人数 Y 県 E 市立 S 小学校 4 年 2 組 39 名

授業の実施者 筆者（教職経験 15 年）・学級担任（教職経験 13 年）によるチーム・ティーチング

授業の概要

第 4 学年では、『進め地球探検隊—自然・人にやさしいまちをめざして』をテーマに、校区内の環境について学習した。実際に校区内を探検しての気づきを、個々に関心を抱いたものについてインターネットや本による情報収集を行い、テーマごとにグループでまとめ、学級で発表しあった。

さらに、研究協力学級である 4 年 2 組では、学習の発展としてドラムジカで自分たちの思いを他の学級や保護者に伝え、外部評価を行う新たな単元を設定した。これは、児童にとって達成感を得る機会となり、振り返りにもつながる。ドラムジカは、他の劇に比べ簡便性があり、児童の思いを歌にのせ凝縮して発信する総合表現として有効であると考えたからである。

本単元までに児童は、7 つの事柄「ツバメ」「カメ」「葦」「酸性雨」「ゴミ」「タバコ」「生活排水」に興味関心を持ち、11 グループに分かれてまとめ学習を行った。それをドラムジカでは、「川・水」「植物」「動物」「人」の 5 グループに解体し、新グループにより台本作り等の作業を進め、最終的には学級で一つのストーリーにつなげた。筆者が T 1、学級担任が T 2、ピアノ伴奏者が T 3 の役割分担で取り組んだ。

分析の方法

分析データとして、事前・事後の表現に関する質問紙調査、「自分づくり振り返り表」、実際の表現活動、学級担任及び調査協力者のインタビューから総合的に比較、分析を行う。

(5) 単元の評価

質問紙調査による事前事後の比較・分析

対象者 39 名による質問紙調査結果から、全体的傾向として次のようなことが考察できる。すべての項目において有意差は見られなかったため、信頼性の保障はないが、事前より事後の平均値が全体的に上昇傾向にあったことから、ねらいや目的を持って何かに取り組ませることの必要性は感じる。

友だちとのかかわりに関する内容において事前より事後が若干伸びていることから、学校生活においていかにかわらせるか、教師は意識して手だてを打たなければならないことが考察できる。つまり、人間関係調整力を身に付けるためにも総合表現活動は有効であると思われる。

有意傾向が見られた「学校で友だちといっしょに学習するのは楽しい」「自分が考えたり調べたことはいろいろな人に伝えたい」「友だちといっしょにがんばってみんなでやりぬいたという気持ちになったことがある」の 3 項目は、「居場所」や「達成感」に関する内容である。したがって、協同的に行う総合表現は、情意面を育むことが期待できると考察できる。また、同様に、「自信」に関する項目は、ドラムジカで行った、台本を作り、人前で台詞を言ったり歌ったりしたことの自信が平均値に若干ではあるが表れているのではないだろうか。ただし、歌も身体表現も好きに

なるまでには至っていない。このことは、好き嫌いはすぐには変わるものではないこと、しかし、何かある一つの目的に向かって集団で取り組みれば、「できる」という自信にはなっていること、この自信こそが大事で、この積み上げがやがて好きにつながっていくのではないかと思われる。また、筆者がドラムジカで大事にしたかった歌への取り組みが最も弱かったことが、この結果からも考察できると同時に、今後の教師の手だてとしての課題が見えてくる。

今回、取り組む過程において、グループ活動が盛んに行われたことが、項目(13)など認知面においても、わずかではあるが成果が見られる。

振り返り表の分析

『自分づくり振り返り表』(毎時間、授業前後に行った自己評価表)による単元最後の振り返りの結果から、総合表現としてのドラムジカは、児童の表現する楽しさや表現意欲を高める導入として適する単元であったことが考察できる。その理由としては、「楽しかった」という児童の記述が多かったことが挙げられる。また、「みんなが笑ってくれたから」(C9)や「みんな喜んでくれて本当に楽しくてうれしかった」(C30)などの記述も目立った。これは、自分たちが楽しむだけでなく、お客さんも楽しんでくれているかどうか、児童は、笑いをとることによって判断している様子がうかがえる。さらに、挑戦意欲度においては、「楽しかったからもう一回やりたい」という挑戦意欲と、「自分で納得のいく表現ができなかったから克服したい」という意味での挑戦意欲が見られた。

「総合的な学習において協同的に総合表現を行う意義」に関する記述も見られる。例えば、1つ目の意義である『自分らしさを発揮する居場所がある』に関しては、「ドラムジカはちゃんと自分の出番があって大きな声で言えるから」(C15)や「すごくうれしかったし、新しい自分にあえたから」(C26)などの楽しさ度の理由記述から考察できる。また、友だちの変容においてたくさんの個人名が自由記述に見られることや、「みんなが笑顔になれた」(C12、C14)との記述からも自分らしさが発揮できる居場所があったと言える。

2つ目の意義である『チームワーク力・協同性が育つ』に関しては、「チームワークがとてもよかった」(C5)というように「チームワーク」を意識し、実感した児童が多かったことがうかがえる。C17やC18の児童もこの表現を用いている。また、「孫役で班長になってがんばった。みんながすごくフォローしてくれた」(C20)や「グループみんなで協力したからうれしかった」(C26)などからもチームワーク力や協同性が育つ要素があると言える。

3つ目の意義である『観察力や想像力が養われる』に関しては、特に児童の記述には見られなかったが、他の人やものの立場になって役作りを考えようとしたことが、友だちのよさに気づくことにつながっていることが全体の記述から伝わってくる。

4つ目の意義である『表現力が育つ』に関しては、楽しさ度の理由記述「ドラムジカは舞台上立ってみんなに見てもらえるから」(C38)や、挑戦意欲度の理由記述「ステージにもう一度立ってみたいから」(C34)は、児童の表現意欲につながる取り組みであったことが考察できる。

5つ目の『自信を与える』に関しては、やり終えた後「すっきりした」(C1)の率直な一言は達成感そのものである。「みんなでドラムジカをやった気がした」(C8)や「前より大きくはっきり堂々と台詞や歌も歌えたので堂々と何でも言えるようになった」(C6)や「自信が持てた」(C7)などから、みんなで表現することで達成感を味わい、それが自信につながったことを児童自身が実感している。

以上、「総合的な学習において協同的に総合表現を行う意義」が児童の意識に見られたことから、本単元は有効であったと考える。「歌を歌ったら楽しくなった」(C6)や「おもしろくて、歌も入っているのよかった」(C22)、「みんなで協力してできたのでとても楽しかった」(C23)の記述からは、ドラムジカの特性が生かされていると考える。「みんなと協力してふだん話し合わない人

ともすごくしゃべれたので、自分や友だちが変わったと思う」(C16)や「ドラムジカで色々の友だちと話し合えたから」(C26)の自由記述は、ドラムジカ作りを通して、以前より、友だち同士コミュニケーションを図る機会が持てたことで友だちのよさに気づくことができたと言える。

以上のことから、集団で表現できる学校教育のメリットを生かした導入として、本単元の取り組みは有効であると考えられる。

インタビューの分析

子ども側の成果としては、1つ目に、「テーマに込める子どもの思い」が深まった話し合い活動の充実である。2つ目に、いつも以上に「子ども同士のかかわり」が生まれ、友だちの新たな一面を見ることができたグループ化である。3つ目に、「グループ練習によるアドバイス合戦で集中力が高まった」などの相互評価や、他の学級や保護者に表現発信するなどの外部評価である。4つ目に、「子ども自身が表現することを楽しむ」「一人一人に役割がある」「ドラムジカの中に子ども同士の協同性が求められる」「曲をかりて歌に乗せメッセージや思いを伝える」などのドラムジカの特性やよさである。5つ目に、「やることになったドラムジカから自分たちがやりたいドラムジカに変わっていった」など子どもの変容や、「自分たちのドラムジカと思うようになった」ことから仲間意識が芽生えたことである。6つ目に、「終了後、集中力が高まり、なおかつ、ほっとしていた」ことから達成感が得やすかったことである。

以上、挙げたことは、教師側の成果である相互・外部評価や心的条件に見られる教師の手だてが関係していると考えられる。

一方、子ども側の課題として、台本作りや選曲などがスムーズに行うことができるための計画や人間関係調整力、つまり、環境づくりとして挙げたことは、教師側の課題に通じるものである。「表現を深めるための時数確保や練習場所の確保」また「複数の教師が共通理解し協力することが大切」であるが、その場合、限られた時間の中で「教師同士の思いや考えをどのように共通理解するのか」など物理的条件における教師の手だてが今後の課題である。したがって、教師は、4月から1年間の見通しを持って手だてを考えていく必要がある。つまり、ドラムジカの総合表現においても、ドラムジカができる環境をそろえていくことが大切であると考えられる。

4 研究の成果と今後の課題

本研究では、児童が主体的協同的に創り上げていく総合表現活動を通して、豊かな表現力を育成するための総合学習単元の開発を試みた。総合的な学習の時間では、「ふれる・つかむ・調べる・まとめる・伝える・ふり返る」といった一連の追求活動を行うが、「まとめる・伝える」手段として多様な表現活動が見られる。その中でも言葉や音楽、身体などを使った総合表現は、表現力を高めるだけでなく、仲間意識を育み、集団としてやり遂げた達成感を生み出すことが協力校における児童の姿から明らかになった。

総合的な学習で学んだことを発信する手段として多様な表現方法がある中で、ここではドラムジカを取り入れた。なぜならば、ドラムジカには、次のような教育的効果が見られるからである。

ドラムジカの教育的効果の1つ目は、「自他のよさに気づく」ことである。一人一人に役割や出番を与え、みんなでアイデアを出し合い、みんなの考えをつながけながら創り上げていくからである。

2つ目は、「表現力が育つ」ことである。豊かな体験活動を通して伝えたい思いへと表現意欲がかきたてられた時、一人一人の表現したことを受けとめ認めたり励まし合ったりする仲間の存在が表現力を育てる。

3つ目は、「協同性が育つ」ことである。集団で一つのものを創り上げるプロセスを踏むことにより、一人では成立しがたいものも、集団で取り組めば思いもよらないものが生み出せる可能性がある。

このような3つの要素が合わさって極めて高い「達成感」を生み出し一人一人の自信となっていく

のがドラムジカの教育的効果である。このことは、「すっきりした」「みんなでやった気がした」「自信が持てた」の児童の言葉が明らかにしている。

また、ドラムジカは総合表現活動の導入には最適であり、どの学年でも行うことが可能である。表現することを楽しむ低学年においても、表現することを楽しみながらテーマ性を持たせたい中学年においても、さらにテーマ性も表現技能も高くなる高学年においても、ドラムジカは体全体を使うので感情が伝わりやすく、互いの個性をつなげ生かし合いながら楽しく表現できるからである。

今後の課題としては、総合表現がよりよくなるためには、総合的な学習の時間だけでなく、国語や音楽等の教科学習や、朝の会・帰りの会を含む年間を通しての表現活動を行うことが重要である。

学校教育において、児童・生徒の表現力の乏しさからコミュニケーションが上手いかず人間関係に問題を抱えている教師が多い中、ドラムジカなどの総合表現活動を取り入れることによって、児童・生徒が変容するきっかけとなり、教育効果が見られると思われる。それは、総合表現によって教師自身の感性が磨かれ、児童・生徒の違った面に目が向けられ相乗効果と成り得るに違いないからである。

児童が総合学習で調べた内容をどのようにまとめて伝えるのか、その一つの方法としてドラムジカがあり、今後は、教師を支援するワークシートや手引き書が必要ではないかと考えている。そうすれば、総合表現活動を行いたくてもどのように行えばよいか分からなかった教師も、またそういう気持ちすら持たなかった教師も取り組んでみようという気持ちになるのではないだろうか。ドラムジカなどの総合表現は、S小学校の先生方や児童がそうであったように体験してみて初めてそのよさや楽しさを理解することができる。

本研究で明らかになったことをもとに、児童と共によりよい総合表現を目指して自らの実践に代えていきたいと考えている。

引用文献

- *1 中村雄二郎(1979)『共通感覚論』岩波新書 pp.8-9
- *2 教育課程審議会(平成10年7月29日)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について(答申)』
- *3 中央教育審議会(平成15年10月7日)『初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について(答申)』
- *4 文部科学省(平成11年5月,平成16年3月 一部補正)『小学校学習指導要領解説 総則編』
- *5 金井慶子『自己表現力を育成する総合表現の単元開発に関する研究』(1999年度 鳴門教育大学修士論文)

参考文献

- ・伊藤嘉子編者(2000)『子どもとつくる劇あそびドラムジカ』音楽之友社
- ・小島律子・澤田篤子(1998)『音楽による表現の教育 - 継承から創造へ - 』晃洋書房
- ・片岡ハルコ(1990)『感性と教育』日本エディタースクール出版事業部
- ・竹内敏晴(1999)『教師のからだとは考』筑摩書房
- ・田中博之編(2002)『総合表現型カリキュラムを創る』明治図書
- ・富田博之(1993)『演劇教育』国土社
- ・西園芳信・小島律子(2000)『総合的な学習と音楽表現』黎明書房
- ・無籐隆(1994)『体験が生きる教室』金子書房
- ・村川雅弘編著(1996)『総合的な学習のすすめ』日本文教出版
- ・村川雅弘・小林毅夫(1999)『改訂小学校学習指導要領の展開』明治図書
- ・ルドルフ・ラバン 神沢和夫 訳(1985)『身体運動の習得』白水社